

〔課題演習抄録〕

運動の楽しさを味わわせる体育科授業の研究
—課題を明確化させる思考ツールを用いて—町 元 昂 希
Koki MACHIMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：体育科授業，運動の楽しさ，思考ツール

1 研究の目的

平成 29 年に告示された学習指導要領に記載されている保健体育科の目標に、「心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す」と記されている。そのため、体育の授業を通して生涯にわたって楽しみながら継続することができる運動やスポーツを生徒自身が見付けることがとても重要になると考える。ところが近年では、運動に積極的に取り組む子どもとそうでない子どもの二極化傾向が指摘されている。そこで、生徒一人一人に体育の授業を通して、運動やスポーツの楽しさを味わわせることは重要な課題であると指摘できる。

また、橋本ら（2013）は、スポーツにはそれぞれの特性があり、その中に面白さがある。その面白さを知り、またやってみたいと感じる必要があり、そのようなモチベーションを育てるのは学校教育の体育の役割であるが、現実の体育は、その役割を十分にはたしていないと述べている。このことから、生徒にスポーツに対するモチベーションを高めながら、運動の楽しさを味わうことができるように体育科の授業改善に努めることが必要であるといえよう。

さらに、沖本（2017）は、保健体育科の授業において、思考ツールを活用することは、頭の中で思い描いた事柄や得た知識を整理してまとめたり、筋道を立てて考えたり、また分析したりすることにより、技能の向上につなげることができると述べている。そこで、体育科授業において思考ツールを用いることによって、運動やスポーツの技能向上を意図して、知識を整理し目標を明確化させる。そして、その目標を達成することによって、

生徒自身が体育授業に楽しさを感じることができるよう授業の工夫をしていきたい。

以上のことを踏まえて本研究では、思考ツールを用いて運動の技能向上に関する課題を生徒一人一人に明確化させることを通して、運動の楽しさを味わわせる体育科授業の実現を図ることを目的とする。

2 研究の計画

平成 30 年 7 月～	先行研究の検討
平成 31 年 1 月	実践授業
平成 31 年 2 月	実践授業①の分析
令和元年 9 月	実践授業②の検討
令和元年 11 月	実践授業②
令和元年 12 月	実践授業②の分析

3 研究の内容

実践授業①については、令和元年 10 月 1 日に報告済であるので、ここでは実践授業②について以下に示す。

(1) 実践授業②の概要

単元名	器械運動
本 時	マット運動「倒立前転」
実施日	令和元年 11 月
学習者	北九州市立中学校第 1 学年 32 名
主 眼	思考ツールを用いてマット運動の倒立前転における個人とチームの技能向上に関する目標を明確にもち、その目標達成に向けて意欲的に取り組むことができる。

(2) 授業実践②の手立て

ここでは、中学校1年生女子の器械運動「マット運動」の単元で実践授業を行う。本時では、事前に実態調査をとり、マット運動の得意な生徒、苦手な生徒が固まらないように4人～5人のグループを編成して、倒立前転の技能習得に取り組ませる。ここでは、体育館の壁面に掲示する倒立前転のポイントをまとめた資料を参照させながら、倒立前転の技能向上に向けた知識や技能の向上に関する課題を整理させる。その際、思考ツール（ベン図）を用いて、個人とグループの目標を明確化させる。この目標を達成させる支援を行い、個人とグループの目標達成を促すとともに、倒立前転の技能の向上を図り、成就感が実感できるように授業を展開する。

(3) 実践授業②の実際

器械運動「マット運動」については、生徒が苦手意識をもつ単元であると先行研究等で指摘されている。また、本単元の実践授業の前に実施した実態調査の結果からもマット運動に苦手意識をもっている生徒が数多く存在していることが分かった。このような実態を踏まえて、マット運動が得意な生徒と苦手な生徒がグループに混在するようにグループ編成を行い、生徒の間で教え合えるような場づくりを行った。特に、授業の導入段階で、生徒に本時の課題を明確にもたせるために、思考ツール（ベン図）を用いて、倒立前転のポイントをまとめた掲示物を参照させながら、知識を整理し、個人とグループの目標を意見交流させた。その結果、マット運動が苦手な生徒は、個人の目標について得意な生徒にアドバイスを受けながら目的意識をもって倒立前転の練習に取り組んでいた。また、マット運動が得意な生徒は、自身の演技を見せたり、アドバイスをしたりすることによって、課題を克服することができた生徒を称賛していた。さらに、マット運動の得意不得意にかかわらず、演技をする際に補助をしたり、励ましあったりするなど、生徒たちが運動する楽しさや達成感をもって協力しながら練習する姿も認められた。

4 成果と課題

実践授業①では、数多くの生徒が苦手意識をもつ、「持久走」の単元で授業を行った。本授業では、思考ツール（ベン図）を用いて、自分たちで立てた目標を確認しながら、「持久走」に意欲的に取り組んでいる生徒が多く見られた。また、本授業の事前事後に実施した実態調査の「走ること

が好きですか。」という設問に対して、肯定的な回答率が7ポイント伸びていた。また、「思考ツールを使うことにより目標が明確になりましたか。」という設問については、約90%の生徒が肯定的な回答をした。このことから、多くの生徒が目的意識をもって授業に臨み、また、「持久走」に対して苦手意識をもつ生徒が積極的に取り組むようになったことがわかった。それに加え、事後の実態調査に、「目標をもって取り組むことで走ることへの意欲につながった。」「走ることは苦手だが、仲間と協力することで頑張ることができた。」などの自由記述が見られた。これらのことから、「持久走」の記録を伸ばすために、課題を明確にもって授業に取り組むとともに、仲間と協力して授業に取り組んだことを読み取ることができた。

実践授業②では、本授業の事前事後において実施した実態調査の結果を見ると、「体育の授業は好きですか。」という設問についての肯定的な回答率が12ポイント伸びていた。さらに、「マット運動は好きですか。」という設問についての肯定的な回答率は、15ポイント伸びていた。

これらのことから、本実践によって、「マット運動」に対する苦手意識が軽減された生徒がいることを読み取ることができる。なお、事後の実態調査の自由記述を見ると、「目標を整理することによって、やることが明確になった。」「仲間と協力することでマット運動が楽しいと感じた。」などの記述が多くみられた。

以上のことから、体育科授業において思考ツールを用いて、個人及びグループの課題を明確化させ、生徒に目的意識をもたせることにより、運動の楽しさを味わわせる体育科授業に迫ることができたといえよう。

今後の課題は、本研究で実践した「持久走」や「マット運動」の単元に加え、他の単元においても、課題を明確化させる思考ツールを用いた実践授業を積み重ねて、運動の楽しさを味わわせる体育科授業を実現していくことである。

主な引用・参考文献

- 沖本由佳里 (2017) 「生徒の主体的・協働的な学びを保障する保健体育科授業づくり—アクション・リサーチ型プログラムの実践を通して—」『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要』59号 74-81
橋本剛幸、永浜明子 (2013) 「生涯スポーツにつながる小学校、中学校、高等学校の体育カリキュラムの研究—スポーツの楽しさを重視した授業を目指して—」『大阪教育大学紀要』61号 61-72